



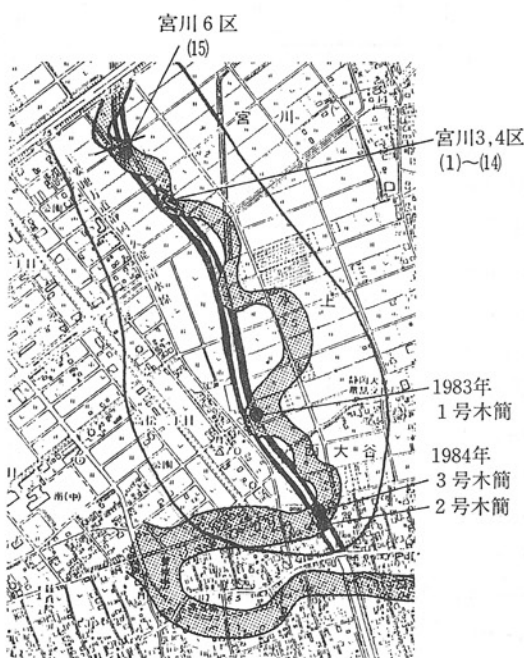
(静岡)

本遺跡は、静岡平野の南東部を流れる大谷川流域に所在する。安部川扇状地の末端と、東側の有度山丘陵とに挟まれた低湿地を流れる大谷川の兩岸にひろがる南北約1km、東西約500mと静岡市内最大の遺跡である。

本調査は大谷川放水路建設工事に伴ない、大谷川の川幅の拡張のため兩岸を幅

静岡・神明原・元宮川遺跡

- 1 所在地 静岡市大谷（高松・水上・西大谷・宮川）
- 2 調査期間 一九八五年（昭60）四月～一九八六年三月
- 3 発掘機関 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 4 調査担当者 栗野克己・成島 仁・小島日出一・森下春美・足立順司・矢田 勝・鈴木基之・寺田甲子郎
- 5 遺跡の種類 祭祀遺跡・集落跡・河川跡
- 6 遺跡の年代 縄文時代～近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



遺跡の範囲と旧大谷川河道推定図

約200m広げるためのものである。遺跡の中央部を南北1kmにわたって貫通するため、昭和五年度から発掘調査を開始、昭和六〇年度は遺跡のほぼ北半部を調査した。調査の結果、旧大谷川の河道が検出され、その埋積土内から、古墳時代後期・奈良・平安時代・中世にかけてのおびただしい量の祭祀遺物が出土、古代～中世における大規模な「水辺のまつり」がおこなわれていたことがうかがわれる。また、旧大谷川の兩岸にひろがる微高地上には、弥生時代、奈良・平安時代、中・近世にかけての竪穴住居跡・掘立柱建物・井戸・溝

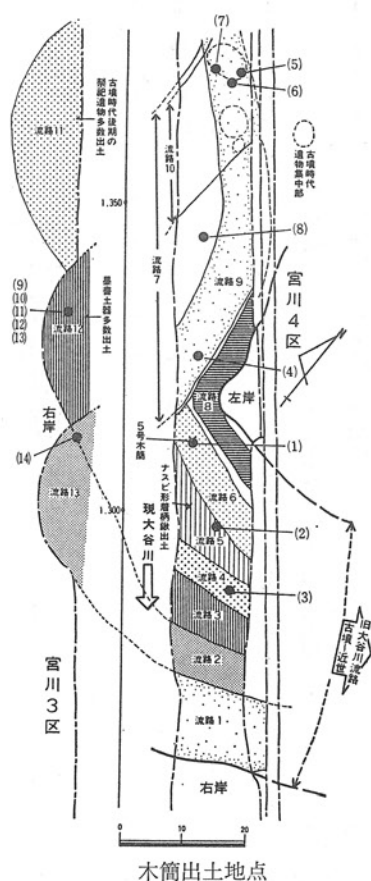
・土壇・柵列・粘土採掘跡などの遺構が検出された。

昭和五八・五九年度に四点の木簡が発見されており、すでに報告した。昭和六〇年度は、一五点の木簡が旧大谷川河道の堆積土層内から出土した。旧大谷川河道は、ほぼ古墳時代後期から形成されたもので、現代まで継続しているが、蛇行・侵食による変遷がみられ、

①古墳時代後期、②奈良・平安時代、③平安時代末～中世、④近世～近代、⑤現在の流路に大別できる。新しい時期の流路が古い時期の流路を侵食破壊し、古い時期の遺物を混入している部分が多いが、年代幅を特定できる流路が良好に残存している部分もある。

一 宮川3・4区 旧大谷川河道

蛇行する旧大谷川が、右岸側を攻撃し屈曲する部分にあたり、一



流路 1	近世～現代
流路 2	鎌倉～室町時代
流路 3	平安末～鎌倉時代
流路 4	平安時代
流路 5	古墳時代終末～奈良時代
流路 6	古墳時代時代後期
流路 7	平安時代末～中世
流路 8	古墳時代後期
流路 9	近世～現代
流路 10	古墳時代後期
流路 11	古墳時代後期
流路 12	平安末～鎌倉時代
流路 13	中世

宮川3・4区の旧大谷川流路の年代観

三本の流路を検出した。流路の年代観は、ほぼ七期に区分できる。木簡は、これらの流路から一四点が出土した。(1)は流路6の最下層から出土したもので、古墳時代後期の須恵器・土師器など約二百数十点や、斎串、人形木製品、馬形木製品、馬形土製品などの祭祀遺物のほか、杵、編錘、横櫓などの木製品や、耳環、石製紡錘車、砥石なども出土している。須恵器の坏をA群～E群の五群に分類した。これらは静岡県の須恵器の編年観から、ほぼ六世紀中葉から七世紀中葉に比定されている。坏蓋、甕、長頸壺、高坏、平瓶も同時期に比定できるが、甕のうち一点はやや古い様相のものが存在する。そこで(1)木簡の年代観については、伴出須恵器群のうち最も新しいE群の時期が参考となる。さらに、木簡の性格から七世紀第三四半

期となる可能性が強い。類例として、浜松市伊場遺跡一号、二号木簡に伴出した須恵器があり、この流路6とほぼ同じ年代観のものであるという。

(2)木簡は奈良時代(七世紀末から八世紀前半)と考えられる流路5から出土。ナスビ形着柄鍬の完形品、玉類、墨書土器「多麻呂」、人形、馬形、斎串、堅櫛なども共伴した。(3)木簡は平安時代(一〇世紀後半)と考えられる流路4から出土。緑釉陶器、灰釉陶器、墨書土器「中万」「水」などが共伴した。

平安時代末から中世の流路7からは、(4)~(8)が散在して出土した。緑釉陶器、灰釉陶器、横櫛、斎串などのほか、万年通宝・長年大宝なども出土した。

平安時代末から鎌倉時代の流路12からは、(9)~(13)の五点が墨書土器四二点や、緑釉陶器、横櫛、ミニチュアの堅杵・供膳、糸巻、斎串、青磁、白磁などともに出土、一括祭祀遺物と考えられる。



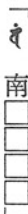
中世の流路13から、(14)と墨書土器四点が出土した。

二 宮川6区 旧大谷川河道

ここでは、宮川3・4区のような整然とした流路は検出されていない。平安時代末から鎌倉時代の包含層より、(15)の文字の書かれた絵馬が出土した。

8 木簡の釈文・内容

一 宮川3・4区

	旧大谷川 流路6	
(1)	・「相星五十戸」 「□□」	135×22×3.5 011 五号
(2)	旧大谷川 流路5 「  □□」	(222)×15×8.5 039 十一号
(3)	旧大谷川 流路4 「  □□」	88×9×4 032 四号
	旧大谷川 流路7	
(4)	「  南□□□□」	201×20×2.5 051 六号
(5)	「□□」	(178)×12×6 059 七号
(6)	「□□永二年」	081 八号
(7)	「□□」	(148)×29×5 081 九号
(8)	「□□」	255×22×2 051 十号
	旧大谷川 流路12	
(9)	「仁王□□」	(120)×23×4 081 十二号

(10) 「南天」□□□□ (184)×18× 061 十三号

(11) 「南」^[妙カ]□□× (79)×19×5.5 061 十四号

(12) 「南×」 (539)×27×12 061 十五号

(13) 「南□大日×」 (135)×22×5 061 十六号

旧大谷川 流路13

(14) 「南無大日□□」 227×22×3.5 051 十七号

(1)の「相星」は、『和名類聚抄』駿河国有度郡の項に記載されている郷名のうち「會星」(アフホシ)に該当するものと考えられる。五十戸の五の字は一部不明瞭である。戸の字は右に一画余分な点がある。裏の二文字のうち、一文字目の偏を馬と解することができる。旁は不鮮明であるが、上に口のような墨痕がうかがえる、驛の可能性もあるが定かではない。二文字目は、長と読むのか表と読むのか判然としない。

(10)~(13)は、頭部が五輪形に刻まれており、(9)とともに文字部分が浮きでているので、卒塔婆として雨ざらしのうえ折損したと考えられるものである。(4)(5)(8)(14)は頭部を圭頭にととのえ、最上部に梵字が一文字書かれているものもある(4)(14)。これらの木簡の中には「南」の字から始まるものが多い。

年号の書かれた木簡(6)は、削屑であるうえ、上下とも切断されている。同一土層からの伴出遺物に、一三世紀頃の瓷器系小皿がある。

二 宮川6区

旧大谷川 流路6

(15) 「(人物・馬の頭)」^(穿孔)

「^{引カ}」

・「このへ見てハ」

「^{引カ}」^{↑カ}ハ人能心を

「^{引カ}」^{↑カ}ハ人能心を

(穿孔)

107×(45.5)×4 061 十八号

絵馬であり、一面に馬を引く人物が描かれている。馬の尾の右側にひらがなが三文字書かれているが、三文字目は板が切断されているため欠損している。裏面には長軸方向に三行の文字がみられる。一行目に「このへ見てハ」とあることから、表の絵と関連が深い願文が記されていると考えられるが、文意は判然としない。

8 関係文献

静岡県埋蔵文化財調査研究所『静岡県神明原・元宮川遺跡木簡概要』(一九八五年)

同『静岡県神明原・元宮川遺跡 大谷川放水路建設に伴う発掘調査概報』(一九八六年) (栗野克己)